学校教育における考古資料の教材化と実践

尾崎昌之

1．はじめに

筆者がかつて勤務した亀岡市立南桑中学校の校区には、弥生時代前期から中期にかけての環濠で知られる太田遺跡・古墳時代後期頃の鹿谷遺跡・群集墳である北金岐古墳群など教材になりうる遺跡に事欠かない。しかし、考古資料を咀嚼する力量不足のため実践にまで高めたものはあまり見当らない。むしろ、中世の山城の土一揆や近世の口丹波の百姓一揆などを扱うものが多い。

では、今までの考古資料はどう扱われてきたかを整理すると、①単元ごとに使える資料を投げ入れ的に活用する。例えば、写真やスライドで資料を紹介したり実物を教室に持ち込む。②復元学習で古代人の生活に触れる。縄文土器や竪穴式住居の復元(注1)を夏休みを利用して行なう。③発掘見学や体験発掘で古代人の知恵や文化に触れる。校舎が改築され、遺構が出てきたときや近くに発掘現場がある時以外は困難である。残念ながら、これらの扱いはその単元の補助的な理解にとどまる場合が多いのではないかと思う。

考古資料を使った歴史の学習(注2)は、その地域の移り変りやようすをもっとも身近に理解できる格好の教材であり、興味をもたせられる学習になるはずである。だからこそ、考古資料を使った歴史の学習は、ある意味では郷土(地域)の学習に昇華させることができるのではないかと考える。今回の報告は、古代の一例という位置付けにしたい。拙論を承知のうえ、今までの考えを整理していきたい。なお、時期は古墳時代全般とする。

2．教科書は古墳時代をどう記述しているか

教科書の記述を通して学校教育のなかで、教える側としてもっておけばよい認識も示したい。なお、教科書の記述は学習指導要領の改訂(注3)のたびに書き替えられるので、記述の変遷に絡めて論じていきたい。教科書の変遷において、大きく4つの画期(注4)があるのに気付く。

Ⅰ．戦後～30年代　考古資料の背後にある、ものの見方を重視せず、紹介的な印象を受ける。資料においても、古墳や埴輪の写真がほとんどである。この間、二度の学習指導要領の改訂が行なわれている。44年の学習指導要領には33年の現行学習指導要領の問題点が

付表１　「古墳」の教科書の変遷一覧

出版社等	学指	古墳の解釈など	古墳の施設	副葬品	大和政権との関わりなど
昭和26年日本教図	１改	貴族を葬った墓、権力や富のある少数の者に限定	石で囲んだ部屋に石棺・木棺を入れる	棺内に鏡・首飾・土器・農具・工具・武器・馬具を収める	邪馬台国が後の大和である奈良盆地にあった大和は勢力を得て国土を統一
		仏教の伝来により、７世紀頃に造墓はおわる	埴輪を埋葬する理由明記　服飾復元できる	※遺物の説明は詳細すぎる	
昭和29年大阪書籍	２改(31)３改(33)	特に前方後円墳は墓として最も進んだ形式で有力者の墓としている　近畿地方に始まり各地に広がる	埴輪を周囲に点じる石室をわかりやすく説明　横穴式石室の説明不十分	有力者の古墳からは、銅剣・銅鏡など、その権力をしのばせる品々が出る鉄器の位置づけ明確	東亜の形勢の影響で日本も統一国家を作り上げる・４世紀後半頃と比定
昭和35年大阪書籍		昭和29年と同じ	埴輪は土留め用に用いる	昭和29年と同じ	東アジア変動の中で統一国家造られる
昭和41年大阪書籍※魏志倭人伝掲載される		３世紀頃、天皇や有力な豪族は立派で土を高く盛った大きな墓をつくる	簡略化している石室に縦穴、横穴式の別あり（注記の形）	副葬品の変化に少し触れる・・のちに鎧、兜、馬具、土器などもともに入られた	大陸文化を早くから受け入れた大和地方には有力な豪族が表れ、次々に国を平定４世紀中頃統一
昭和43年大阪書籍	４改(44)	昭和41年と同じ※応神陵・仁徳陵の規模の大きさ特記	石室には死体を収める棺がおかれる	棺内遺物の列挙	東北地方・南九州を除く日本の大部分統一
昭和46年大阪書籍		古墳の説明は同じだが、大きさでピラミッドと比較している	昭和43年と同じ	棺内遺物の列挙	昭和43年と同じ
昭和52年大阪書籍	５改	古墳の広がりは特に詳しい。３世紀に近畿や瀬戸内地方で造られ５世紀には東北南部から南九州まで見られる	斜面には石を敷きつめる（葺き石）古墳のまわりや頂上に埴輪がおかれる	神を祭る勾玉・管玉・銅鏡、鉄器の貴重性特記	大和・河内地方の族長は大王と呼ばれたもとに集まり神の祭りや軍事などの仕事を分担
平成元年大阪書籍	６改	昭和52年と同じ	木が繁っているが、もとは斜面に石を敷き詰め、まわりや頂上には埴輪がおかれる	後円部の中心に棺がおかれる：遺物の記述は変わらない	大和王権は大和・河内の有力な氏にささえられている

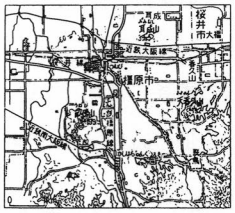
※１改は学習指導要領の第１回改訂を意味する

示されている。「歴史年表、歴史地図、その他の諸資料をいっそう適切に利用する能力などについて、示し方が不十分である。」凡そ、それにそった内容と言えそうだ。

Ⅱ．昭和40年代　古墳時代のはじまりや古墳の広がりにも言及している。また、大和国家の統一が主であり、古墳文化の特色などは従となっている。それは、学習指導要領の改訂(44年)と連動している。「はじめ群小勢力の分立状態にあった社会が、しだいに大和朝廷によって統一されていったことを理解させるとともに、古墳文化の特色を理解させ、当

大和朝廷のなりたち
①大和朝廷
②朝鮮半島のようす
③朝鮮・中国との関係

北九州とともに弥生文化の中心となっていた大和地方には、早くから有力な豪族がたくさんいた。やがてその一つが付近の豪族をつぎつぎにしたがえたり，他の豪族と連合したりして，大和朝廷をつくり，おそくとも，4世紀の中ごろまでには，東北地方と南九州をのぞく日本の大部分を支配するようになった。この大和朝廷の中心となった王は大王とよばれていたが，後に天皇とよばれるようになった。



奈良盆地の南部　大和朝廷はこの地域を中心に発展した。

〔大阪書籍(昭和46年)大和朝廷と古墳の関わりの一部〕

巨大な古墳
①古墳
②副葬品
③埴輪

国土の統一がすすみはじめた3・4世紀ごろから，天皇や有力な豪族は，小山のようにもり土をした大きな墓をつくるようになった。これを古墳といい，外形によって円墳・方墳・前方後円墳などに分けられる。前方後円墳はわが国だけにみられるもので，近畿地方を中心に，朝廷の力が地方にのびるにしたがって各地につくられた。なかでも5世紀の仁徳天皇陵はとくに大きく，その面積はエジプトの大ピラミッド(→p.14)の3倍以上もある。これは，日本が大陸文化をうけ入れて，すぐれた土木技術をもっていたことや，そのころの天皇の権力の強かったことを物語っている。

古墳の内部の石室には棺がおさめられ，銅鏡・鉄剣・玉や鉄製の農具など，豪族の力をしめすものがいっしょにほうむられた。これは，古墳文化が弥生文化よりはるかに発達していたことをしめしている。古墳のまわりには多くの埴輪が立てならべられた。これらによって，そのころの生活や風俗をしのぶことができる。

仁徳天皇陵(大阪府堺市)　前方後円墳で，総面積はおよそ464,000m²，長さは約480m，幅約305m，後円部の高さ約36m，三重のほりをめぐらし，面積では世界最大の墓である。

〔大阪書籍(昭和46年)古墳の一部〕

大王と各地の王

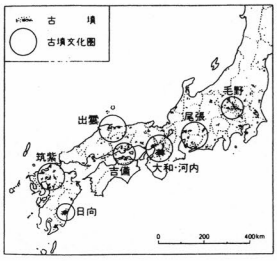
大和(奈良県)・河内(大阪府)地方には，全長200mをこす大古墳が数多くみられます。この地方の族長は，大王といわれた者のもとに集まり，神の祭りや軍事などのしごとを分担して人々を支配していました。この政府を大和朝廷とよんでいます。ほかの地方でも，吉備(岡山県)や出雲(島根県)・筑紫(福岡県)などでは，大きな古墳がかたまって発見され，族長が地方の王のもとにまとまりをつくっていたことがわかります。

4～5世紀にかけて，大和朝廷は各地に兵を送り，地方の王をしたがえました。服従した王は一部の村をさし出し，そこの人々は部民として朝廷の支配をうけました。こうして，大王のもとに地方の王が連合をつくっていたのが，当時の日本のようすだったと思われます。

〔大阪書籍(昭和52年)大和朝廷と古墳の関わりの一部〕

古墳

古墳は，土をもりあげてきずいた大きな墓で，3世紀末ごろから近畿や瀬戸内地方でつくられはじめ，5世紀には，東北地方南部から南九州までみられるようになりました。形は前方後円墳とよばれるかぎ穴型をしたものが多く，斜面には石をしきつめて土くずれをふせぎ，まわりや頂上には，円筒型や人物・動物などをかたちどった埴輪がおかれました。遺体をおさめたあたりからは，勾玉や管玉，神をまつるための銅鏡，鉄製の農工具や武器などがみつかり，これによって，一族を代表して農耕や戦争の指揮にあたった族長が，強い力をもつ支配者にかわってきたことがうかがわれます。



(右)古墳の分布図
(上)武人の埴輪
(鳥取県倉吉市出土)

〔大阪書籍(昭和52年)古墳の一部〕

資料1　教科書の記述比較

時の人々の生活の様子を考えさせる。」という内容からも裏付けられよう。

Ⅲ．昭和50年代　もっとも変化する。副葬品から背後にあるものの考え方や古墳の築造工法などに触れるなど内容豊かである。52年の学習指導要領の内容からも明らかである。「古墳文化を中心に扱い大和朝廷によって統一されていったことを理解させるとともに、当時の人々の信仰に着目させる。」（資料１）

Ⅳ．平成元年～　古墳のようすを現在と比べたり、農具の変化（鉄の使用が顕著）に着目させるなど内容や資料の工夫が一段と進む。「古墳文化と大和朝廷による国の統一を扱い、国家の形成過程を理解させるとともに・・・」と改訂され、国の統一過程ではなく、形成過程に重点が置かれている。

内容の取り扱いにもⅡとⅢの時期では考古学の成果に活用差がある。Ⅱの時期では主に縄文と弥生時代にその成果の活用を説いている。Ⅲの時期では中世までの項目でも適宜活用を求めている（付表１）。

次に教材研究をする上で、生徒の理解を助ける意味において是非とも取り入れたら良い点を５項目ほど要約[注5]しておきたい。

①前方後円墳の理解　教科書において古墳といえば、前方後円墳をさすぐらい重要に扱われている。前方後円墳の大きさや副葬品の豊富さから絶大な権力を持った者が（豪族）納められていると教えた。同時にこれだけの大規模な古墳を造営するために働かされる人々から支配と被支配の関係を認識させるように力を注いだ。果たして、これだけで充分かどうか疑問である。前方後円墳は政治的連合の永続・発展させるために連合に加わっている首長たちが取り入れた共通の墓制だという。つまり、各地域の支配を許された者だけに与えられた象徴だということも教えたい。

②竪穴式石室と横穴式石室の違い　教科書では石室の内部構造の模式図や何も触れていないなど様々である。このように教える側にげたを預けた形になっている。では、どのように理解しておけばよいのか。

竪穴式石室は墳丘上につくられた竪穴土坑内に埋葬を行なうものである。構造的特徴から一人の被葬者だけにつくられたものである。一方、横穴式石室は６世紀以降盛んに採用されたもので、構造上いつでも追葬できる。家族墓的な性格を有している。ややもすれば、竪と横の表面的な構造の違いに終わってしまい決定的な違いを見落としている傾向もある。竪穴式石室からも授業の入り口は作れるのではないか。

③古墳の立地条件　どの教科書も触れていない。特に、前期古墳のほとんどが丘陵先端部や丘陵尾根に築かれる。人々を見下ろす姿勢が表現されているという。また、中期には台地や平地に築かれる。背後にある収奪という図式も浮かんでくる。

④墳丘墓から古墳へ　これは往々にして陥る欠点ともいうべきものであると考える。例えば、前方後円墳と大和国家の単元では、はじめに古墳ありきとして学習に入ってしまう。どんな時代でも重なり合って進んでいくものであり、決して点にはならない。要は古墳時代に入っていくには、その下地となるものが前の時代にあるはずである。「小国の分立」の項で地域の支配する一族のかしらの誕生を明記している。弥生後期には階級的に成長した地位の高いものが墳丘墓に埋葬される(岡山県楯築遺跡)。詳しく扱う必要はないが、古墳は決して突然現われてこないという意味で理解すればよい。

⑤埴輪について　教科書では人物・形象埴輪を重視しているが、むしろ古墳時代を通して作り続けられるのは器形の単純な円筒埴輪である。また、埴輪はすべての古墳に存在しないという。往々にして、古墳には埴輪はつきものと勝手に解釈しているのではなか。

このように考古学の成果を潜入観念で打ち消してしまわないで、基本的な成果を適宜援用していく姿勢こそ大切ではないかと考えている。

3．考古資料の教材化について

よい教材とは何か。私は生徒が活動でき(意見の形成)、容易かつ考えが導けるものでなければならないと考えている。そして、ねらいに基づいて考古資料を選択していく必要がある。具体的に説明してみよう。南丹波最大の前方後円墳である園部垣内古墳と亀岡市内最大の前方後円墳である千歳車塚古墳を教えるといった観点にたって比べてみる。(付表2)現実に存在している古墳の方が生徒にとっては理解しやすいし教材として扱いやすい。以下に示すが古墳の学習で大切なのは、古墳を媒介にして支配構造を理解させることである。それには、古墳の規模・副葬品・同時期の周囲の古墳の分布や様子などを絡めてねらいに迫る必要がある。しかし、両古墳とも一長一短があり、扱いに苦慮するが、ねらいを具体的に迫る意味において園部垣内古墳の方が格好と考えた。千歳車塚古墳も首長墓の変遷をタテに見ることによって格好の教材となりえる。

このように、ねらいを設定して、考古資料を選択すればいいが、その資料自体の困難さを克服しなければ行けない。例えば、遺構図で出土物のむつかしい名前を平易にするとか、平面図は必ず断

付表2　授業に基づいた両古墳の比較一覧表

	園部垣内古墳	千歳車塚古墳
前方後円墳の形	痕跡がなく、推定という形でしか提示できない	現存しており、形として理解しやすい。
立地条件	削平により分かりづらい	現存しており、地形図からも判断できる
副葬品	図示でき、遺物の豊富さ(鉄器など)が実感できる	調査されておらず、不明
周囲の同時期の古墳	周山1号墳・向山古墳(聞き書きによる内容)　注6	瀧ノ花塚古墳？・保津山古墳（出土状況も図示できる）

付表３　前方後円墳と大和国家の授業展開(案)

展開項目	展開内容	留意事項
古墳とはどんなもの	教科書の記述から古墳の基本を押さえ、具体的に古墳からわかることを学習していく	大山古墳の築造にかかる期間・人・工費の紹介、古墳のスケールの大きさを実感させる
どんな人が納められているか	丹波の同時期の３つの古墳を調べる　①園部垣内古墳②周山１号墳　③向山古墳　調べる内容１，古墳の種類２，時期３，大きさ４，副葬品→規模や副葬品から納められている人を考えていき、その中で①の古墳の位置付けを考える→②③の古墳の位置付けを考える	副葬品の個々の説明は簡略にする３古墳の位置は大地図で確認
古墳を作った人は？	古墳築造模式図から、携わった人を見つけ、その人の生活や願いを考える。→支配階級の発生	生産の発展の観点忘れないように
前方後円墳の分布からわかること	広域政治連合の誕生(大和)大和王権の仕組みを説明する	分布や副葬品などから傍証的にすすめたい

面図を添えたものにするとかの工夫は必要であろう。

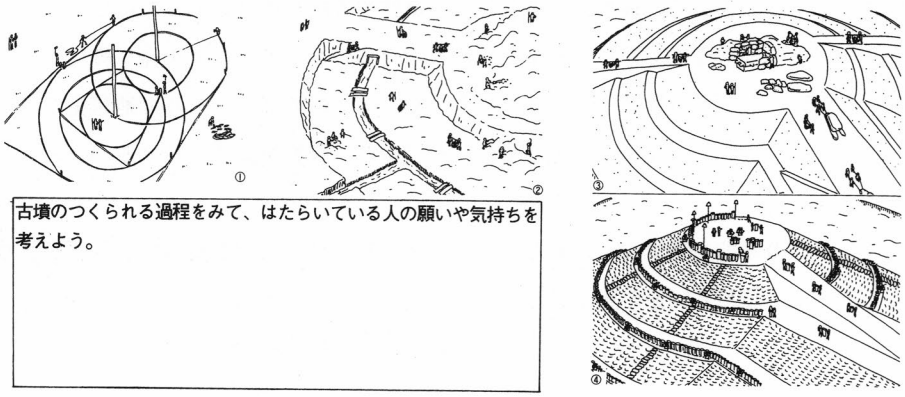
４．前方後円墳と大和国家―身近な考古資料を使って―(資料２)

実践を展開していく場合、生徒に何を教えたいのか(理解させたいのか)を明確に示す必要がある。それは、①強力な支配構造ができたことを古墳を通して理解させる。②古墳の副葬品から当時の被葬者や人々の様子を理解させる。③渡来人の技術が生産の発展につながったことを理解させる。私は身近な考古資料を駆使して実践の展開を考えているので、次のことを付け加えたい。大和王権の支配は九州南部と東北地方を除いた日本列島の大部分を従えた。当然、亀岡(丹波)のにもその支配が及んでいたことを気付かせたい。分布から当然、亀岡(丹波)も支配圏になるが、傍証という形で進めたいと考えている。以下、展開項目を一覧表にして示しておく(付表３)。

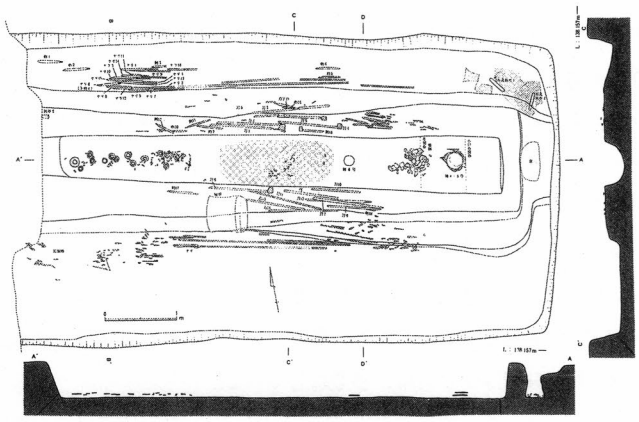
５．おわりに

今回の実践報告案は次の点を重視した。古墳を通して支配構造を理解させるという点である。支配構造をどう解釈し実践に結実させるかが問題となる。支配構造というのは、①支配者と被支配者との階級関係、②それらを取り巻く政治体制による支配の２側面を意味すると考えられる。それは当然、前方後円墳を題材とする。①②を通して社会のようすを理解していくことになるはずである。それは、口丹波の古墳を通しても構成できると考えた。また、もう一つの試みにも挑戦した。考古資料を総合することで、ものの背後にあるものが見えることに着目して、できるだけそうしたものの見方が身につくように、ねらいにそった考古資料を提示したつもりである。

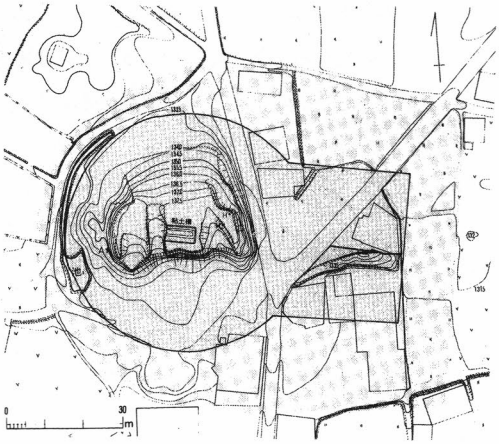
しかし、課題も多いのも事実である。①中学生でどこまで教えるのか、関連して小学校の歴史学習とどう結びつけていくのかが不明瞭ではないか。②埴輪の扱い方が不十分ではないか。③大和王権の統一で対外情勢をどう絡めたらよいか。④当時の人々の生活の跡を



古墳のつくられる過程をみて、はたらいている人の願いや気持ちを考えよう。



向山古墳（亀岡市）
径約32m、高さ約4,5mの円墳で、前期に属する。鏡・刀・剣・鉄製の斧、ノミ、甲冑類、銅ぞく等出土。
周山１号墳（京北町）
一辺約16m、高さ２mの方墳で石で覆われている。埴輪が出土。前期の古墳と推定されている。



	園部垣内古墳	向山古墳	周山古墳
時期			
古墳の形			
大きさ（m）			
副葬品			

資料２　前方後円(注7)墳と大和国家の学習プリント

古墳と同じくらい出してもいいのではないかなど限りがない。今回の報告は、はじめにも記したように古代の一例として構成している。本来ならば、古代を通史的に扱かわなければならないことは明らかである。鹿田雄三氏の考古資料による地域史学習の地域史編成の視点は、これからの方向性を示唆してくれているので引用したい。「授業で地域史学習を行なおうとするとき、その地域にある各時代の遺跡や資料を寄せ集めただけで、地域史が成立しないことは言うまでもない。また、考古学自体のもっている先土器・縄文・弥生・古墳・歴史時代という時代区分を、地域にそのまま当てはめても、それで地域史が成立するわけでもない。要は、地域史の中心軸に何を設定し、資料を集め解釈するかということである。」

最後に、この報告を執筆するにあたり京都府南丹教育局・大阪書籍には資料の提供などご協力頂いた。記して感謝の意を表したい。

（おざき・まさゆき＝当センター調査第２課調査第２係調査員）

注１　府下的にも実施はされているが、町の事業や卒業制作に結びつけて竪穴式住居を復元している。最近では1993年に美山町立大野小学校が復元している。

注２　現在の履修形態は大部分がπ型に移行している。π型は地歴並行学習とも言われ、１・２年で地理、歴史を交互に学習する。現行140授業時数（１授業時数50分）の１授業時数が古墳の単元に当てられているのが現状のようである。

注３　文部省が定める小学校～高等学校の教育過程の基準。

注４　画期を学習指導要領の改訂年と合致させていない。大体の傾向という扱いで捉えている。

注５　古墳・古代を考える（白石太一郎編、吉川弘文館）、考古資料の見方　遺物・遺跡編　甘粕健著　柏書房、日本の歴史Ｉ　朝日新聞社刊等から引用、参考にしている。

注６　向山古墳の時期が定かでないが、ここでは南丹波の王（亀岡市文化資料館編）の資料や大堰川水系における前・中期古墳の動向は、奥村清一郎氏などの資料をもとにしている。

注７　上段はグラフィティ日本謎事典③古墳　帝塚山大学教授堅田直著　光文社文庫、下段は同志社大学文学部考古学調査報告第６冊　園部垣内古墳　同志社大学文学部文化学科（1990）から掲載した。